

〈シンポジューム〉

中浦幌駅通所と中川北松(Ⅲ)

博物館報告編集局・編

中川政雄 私の親父と一緒に足尾銅山で働いていた友人で、1~2才年は上だったんですけど、その人が岸田六松という人で、その人が晩成社へ入いったんです。今の幕別ね。

山崎 帯広ですか？

中川政雄 いや、幕別です。晩成社というのはあっちこっちにあったんです。今のベカンベツあたりにあったんだ。

山崎 今の相川ですね。

中川政雄 相川か、鉄道で行くとちょっとした市街が、亜麻会社の反対側に…。

山崎 はい、猿別といいます。

中川政雄 あの辺から、少し相川も多少かかっていたかもしれないが…。

山崎 猿別ですね。

中川政雄 あの辺に岸田さんは入った。そして、1年たんうちに「とってもあんたと離れたら寂しくてダメだから」と言って訪ねて来ました。『あたり一面知らない人ばかりだし、いつしょの村に入りたいからどこかいい所ないか』と言うので、「この山越えて行けばいい所あるから行って見て来い。俺が連れて來た人間には『この山越えて行けばいい所あるんだけれども』と言つたけれど『あれからむこうなら金もらって金の茶釜が落ちていても行かない』と言って、誰も行かないのだが、いい所だぞ」と。それで岸田六松さん「そうか」というんで今の山越してここに来たんです。この留真部落へ。

山崎 けつきよく、その先代を慕って來たということですね。

中川政雄 そうです。

山崎 そうして、この大きな敷地も畠地もさっきの計算では随分ありましたね。その畠がけつきよく人にも貸さないで…。

中川シズ 私ら、みんな子どもがつくったんです。それは畠ではなかったですよ。ひどいヤブで

山崎 畠といったって「将来畠になるぞ」ということですから。

中川シズ そして牧夫さん達が枝をおろして、枝を切ったりして私たちができないながらも一生懸命やりました。

山崎 そうですか。木は全部燃やしてしまうんですか。

中川シズ そうですね、薪はよそへあげるほどありました。

山崎 駅通のお客さんに食べさせる物はどんなものでした。先程、「自分達は儉しい物食べてもお客様にはお客様としての料理をつくってあげる」とおっしゃいましたが…。

中川政雄 それは米です。

中川シズ それはお米ですよ。

山崎 おかずは？

中川シズ おかずは主に、川魚を焼くとか…。

山崎 川魚といいますと、あきあじ（鮭）？

中川シズ 何というのか、あきあじまではあがらない。鱈とかあかはら（鰯）、やまべやいわな。

目 次

P 2	〈シンポジューム〉 中浦幌駅通所と中川北松(Ⅲ)	博物館報告編集局・編
P 9	下頃辺式土器とその周辺の諸問題.....	後藤秀彦
P 14	表紙解説「乙部チャシ跡」.....	後藤秀彦
P 15	共栄遺跡B地点出土の土器について.....	後藤秀彦
P 16	編集後記	

表紙写真

乙部チャシ跡

で、都会から来た大阪のお客さんなんかは自分でやまべを釣ったりして、それをこちらで作ってやったりしてね。蕗がこんなでした。ここへ立てかけるだけ大きい蕗でした。

山崎 蕿なんかはもちろん調味料は豊かでなかつたわけですから、どんな食べ方をしたんですか。

中川シズ やっぱりゆでて普通の食べ方とか、ミガキニシンをいれて煮込んだり、まあ色々蕗は食べました。

中川政雄 41年ですからね。それはもう自分らは作ったものでいなきびとかとうきび、ごしょいもを食べたけれど、米だって醤油、味噌だって浦幌市街には豊富なものですね。

中川シズ 私ら生まれてきた時にはひどかった。

山崎 あそこはもう立派に鉄道が走っていたんですね。

中川政雄 もう、一つの大きな市街になっていたからね。そこまでとりに行ってそして仕入れて来たんです。

山崎 この川を使って往き来をしたとか。浦幌川、留真川でアイヌが丸木舟を浮かべていたなんていうことはないですね。

中川政雄 ないね。

中川シズ 流送人夫というのが来たんです。十津川の方から。それから新十津川…。

中川政雄 それは遅い。

中川シズ だって私がやっている時だもの。

中川政雄 だから遅いって。お前がもう一丁前やれるようになってからだもの。

山崎 大正ですか。

中川シズ 17～8才からずっとですね。

山崎 あの中川さん、ここで流送が始まつたのはいつ頃なんですか。

中川政雄 ええ、大正の中頃ですよ。

中川シズ 私が20才前だから。

田中 流送かい。僕が小学校、僕が大正3年生まれですから、学校に行く頃にはもうほとんど終っていたようです。

中川政雄 そうだろう。

田中 だから大正の10年より前です。

山崎 大正初期ですね。

中川政雄 大正は15年だから半分くらいのところです。

山崎 なるほどね。

中川政雄 本別の山中木工場がここの留真の奥で木を切ったんだから。それを出すのに冬は馬車追いがどんどん入ったし、夏は流送やったんです。2～3年間だもの。

山崎 お母さんの話を聞きたいのですけれども。30年にたまたま、なりそめは船の中なんですね

中川政雄 いや、そうではなんですね。

山崎 たまたま、じゃあこの船に一緒に来たということですね。

中川シズ だってお爺さんが移住してきたんだよ朝日の。

中川政雄 わかっているけれども、朝日がね、晚成社へ行く約束だった。それが船の中で「中川さん、あんたどこへ行くんだ」と言ったら「私は大津の熊谷へ行くんだ」と言ったら「一緒に連れていくてもらえんか」と言うから「あんた晩成社へ行くんなら困るんでないか」と言ったら「いや、晩成社断って熊谷農場へ行く」と言うので船の中で朝日又兵衛という私たちのお爺さんになる人に頼まれて「それじゃ、一緒に行くか」と言うんで來たんですよ。

山崎 なるほど。それじゃ船の中でお前が行くなら俺も行くということになったんですね。

中川政雄 それまでは一面識ないんです。

山崎 同じ船で、同じ福井の同じ郡…。

中川政雄 同じ郡だけれども村が違うから…。

山崎 シガラミ村じゃないんですか。

中川シズ そこは西俣村。朝日はね。

中川政雄 大野郡西俣村ですね。

山崎 それでもシガラミ、西俣近いですね。大安寺村、浜白村。それから堺村というのは全部で人口2,500人くらいの寒村でして、移住する頃、明治29年頃ひどい大水害があつたんです。明治26年には濃美地震というひどい地震もあったんです。

中川シズ そうだってね。

中川政雄 うちの親父の足尾銅山からの友人というのは馬場助右衛門、岸田六松さん、田中高市さん。

中川シズ 渡部さんなんかは1～2年おくれてね

山崎 なんと言いました。足尾銅山に2～3年行った時の仲間を後で死んだ時に帰った時に連れてくるわけですね。何戸ぐらいといいました。

中川政雄 24戸。

山崎 24戸の中に足尾銅山の仲間は何人くらい入っていたのですか。

中川政雄 3~4人です。

山崎 ああそうですか。3~4人。あとは自分らの親戚だの…。この先程言った岸田六松というのは?

中川政雄 足尾銅山の友人ですね。馬場助右衛門というのが…。

山崎 皆、入ったんですね。その中で岸田六松というのが一度晩成社に入って戻って来たんですね
中川政雄 ええ、そうです。そして岸田六松さんが「円山からこっち(留真)、全部貰ってくれ」と言うことだった。「お前さん1人でそんなに貰ってどうするんだ?」「いや、俺は内地へ行って親戚などを集めて来るから、俺が帰って来るまで貰えるようにちゃんと手続きしてとってくれ」というんで頼んでおいて「よし、それならそうしてやるから行ってこい」というわけで、岸田さんが内地へ帰って、ここの川畠さんらの親戚を連れて來た。岸田さんがこの留真という部落を…。

山崎 そうすると先程、自分のことは投げ出してとにかく24戸に土地を与えて自作にしてやりたくて支庁に日参をしたという話の中で、現実に北松さんの力で自作になれた方というのはどんな方がいますか? 岸田六松も入りますか。

中川政雄 入りますよ。馬場助右衛門ももちろん入りますし…。

中川シズ 近田さんとか、畠部さん、林さん。

中川政雄 いや、近田なんか遅い、遅いよ。

中川シズ そうお。一緒ではないけどやっぱり上浦幌農場の続きだから。

中川政雄 うちの爺さんを頼って來たんだから。

中川シズ 近田さんなんかね。

山崎 さて、さっきの話なんですが、あきさんという方は當時おいくつぐらいだったんでしょう。結婚された頃は?

中川政雄 18か9だ。

中川シズ 18で内地でお嫁さんになって、そして結婚したのは20才くらいだよ。年を数えてみたらわかる。

中川政雄 俺は21才の時生まれたんだから。

中川シズ だから20才くらいです。

山崎 気丈夫な方でした?

中川シズ 本当に。それに父親は固い人でしたか

ら、いくら出て歩いても心配のない人で、絶対お酒も飲まない、煙草も喫わない、あった物みんなにあげてしまうくらいですから。

山崎 それが、さっきの話しつこいようですが、本当にこの人は大酒を飲むなんていう人は中にはいましたが、こういうことをやる方で酒を飲む方はいないんです。やはり、外で聞いた時も「うちのお爺さんは飲まないのだけれども、人に振る舞うことが多かった」と。

中川シズ そうですよ。それは、この人らも覚えているかもしれない。ここはもっと広かったんです。そこへランプを、この宿屋のランプを7つくらいけさにかけて出して、3部落も4部落も集つて盆踊りするんです。その時に私ら「六升鍋」という鍋に煮染を作ったりおつゆを作つてお赤飯を一斗づつ作る。それを皆な踊った人に食べてもらうわけ。腹がへつたら「さあ、食べなさい。さあ食べなさい」とね。そりやあ、もう本当に…。

山崎 白米を!

中川シズ そうですよ。そして何か部落の人に骨折ってもらう時にはアキアジを俵で買って、そしてやっぱり外でアキアジ鍋をこしらえて食べさせてあげたんです。私らやはり、やっているから覚えているんです。

山崎 それはいつ頃の話ですか。

中川シズ それは20才頃。淨福寺さんが出てる頃だから。先の淨福寺さんだから…。20才頃かな…。

山崎 明治末年?

中川シズ ええ。踊りの人達に振る舞ったのはもう始めからなんです。浦幌市街からも…。

山崎 福井の音頭ですか?

中川政雄 そうです。そうです。

中川シズ 福井の踊りです。「越前踊り」です。

山崎 越前踊りね。今でもそれが残っているんですか。何か服装に特色があるんですか。

中川シズ いいえ。ただ、変装したりはしますけど。

山崎 鳴り物は何ですか?

中川シズ いいえ、そんな物ありますか。

山崎 樽を叩くだけですか?

中川シズ 樽もないです。ただ、一生懸命踊るだけです。

山崎 手を叩いて踊るだけ? 越前踊りというの

は浄土真宗の宗教的な何かが混じっていますか？

中川シズ ないです。この人（田中利氏）のお父さんが音頭取りだった。凄い音頭取りだった。

田中 利 川畠市松。

山崎 先程出ましたね。

中川シズ 扇踊りでも何でも音頭をとって踊ってね。部落の人気が少ないから赤ちゃんおぶった人も皆なで踊ったんです。

山崎 その頃、駅逓が生まれた41年頃から明治いっぱいですね、この留真の駅逓を中心にして何戸ぐらい一般の農家ありました？

中川政雄 今より多い、50戸あった。

中川シズ 本当に時代が変って…。

山崎 まあみなといつていいぐらい福井ですか？

中川政雄 そうです。

中川シズ そこに、おもしろいこの村の名前を作った人がいて…。誰が作ったのかね…。「北海道十勝国稻黍郡かぼちゃ村」そんなのね。でもそれ曰くがあると思う。

山崎 稲黍村ですか？

中川シズ はい。「稻黍郡かぼちゃ村米始終食わん地。名前は身は瘦せ藏と申します」

山崎 これは漢字になおすの大変ですね。これはどういう時に？ 誰なんですか？

中川シズ それは覚えていません。

山崎 そんなことを言った人がその50戸の中に？

中川政雄 それはトンチのいい人だ。

中川シズ それは誰だかわからないけど、私は別に呼ばれるということを聞いて、そんなことを思い出したりしていましたから。

山崎 なるほどね。

中川シズ 本当ですもの。

中川政雄 寄附の中でまだ落ちていた。浦幌市街の昔の軍人分会場の分会の敷地。

山崎 軍人？

中川政雄 はい。軍人分会というのがあったんです。在郷軍人の。

山崎 そうですね。支部は釧路ですね。

中川政雄 その敷地。

山崎 浦幌の街ですか？

中川政雄 街です。それからうちの寺の浄福寺の敷地。

中川シズ 敷地から材料から…。先のお寺も今もあの柱なんか…。

中川政雄 材料は違う。

中川シズ 材料はこの山から採ったんだよ。

中川政雄 留真の温泉の奥まで俺らロープかけて引っぱりに行っているんだ。この山から出た材料なんか1本も使っていない。それは古い寺かなにかだ。今の浄福寺はあっちこっちから1本ずつ集めたものだ。

中川シズ そうかな。それが残っていると聞いたけれど…。

山崎 いろいろ今聞きましたけど、中が多少改造されていますね。

中川シズ はい。

田中 利 玄関が道路側にあったんです。こっちから六畳の二つ目が玄関です。はしご段が玄関から入って真直ぐあったんです。

中川シズ そこの玄関のところが私ら小さい時にお店だったの。

田中 利 玄関入るとそちらの台所の方に廊下がありましょう。その廊下の方に向いてあったの。

山崎 はじめから玄関は出ていました。出張っていました？

田中 利 この玄関を部屋にして現在のこちらの玄間にしました。

山崎 そうすると元の玄関はちょっと出ていました？ 出張っていました。

田中 利 出ていなかったようです。

中川シズ そこをお店にしてあったんです。煙草とか塩とかお菓子とかお酒とか置いてあったんです。

山崎 駅逓の時からですか？

中川シズ はい。

山崎 これもやはり河西支庁から許可をもらっているはずです。

中川シズ そうです。

山崎 とにかくその頃の写真、明治・大正の頃の駅逓に関する写真とか墨汁で書いた文字なんているのは。出でくれば掛軸以外はないですか。

中川シズ ないんだな。あったんだけど火事でみんな焼いたみたいだから。

山崎 火事はいつですか？

中川政雄 火事は私がいたから。それ前にお前らが出たり入ったりして、俺のところへ来た物なんかにはそんなものはないよ。

中川シズ 私らもそっくり川畠さんに譲って農場

へ行ったんだから。火ばし1本持って行かなかつたんだから。でも、掛軸が1本あるけれどあれは駅通には関してないけど。

田中 利 明治100年「北海道100年記念塔」を建てた時、札幌から文化財調査に訪ねて来られて、私が「ここをひきうけてから入ったことのない部屋がある」ということを話したら「是非その部屋を見せて欲しい」ということで、その部屋の中を探したら川畠市松の大正2年か3年の学務委員の辞令があったんです。「是非欲しい」ということで持っていかれたんですけど。

山崎 町史（浦幌町史）には駅通に関することはまず何もない。きょうもお尋ねしたことがどうしてあの町史に載らなかったのかなと思うくらい。こういう明治の、これだけで明治40年代の留真あたりの地域の状態だと盆踊りの様子だと北松さんの活躍振りだとその頃の苦労した話とかがほぼこう明治41年がなんとなく浮き彫りになつた訳です。そういうことが非常に貴重なんですがね。

中川政雄 開村50年の村史をつくる頃には家の爺さん大分もうろくしていました。私がそばで聞いていても大分年号が違っているなと思ったんですけども、私がそういうことを言つたらもう親父はやれなくなるし、また短腹なんで怒る人だから「お前に何が判かる」とやる人だから黙つて聞いていたけれど。大分違つてゐるんです。

山崎 写真も何ものないので人物像のイメージが全然沸かないのですが…。中川さんに似ていらっしゃいますか？

中川政雄 似ています。

中川シズ 農協にここ（胸）から上の胸像があるんです。

中川政雄 あれも富山で作ったんですけど写真もほとんどないものですから。開村50年の時の開拓功労者のいの一番に表彰を受けたのですけれどもうその時はフラフラで私が介添えで表彰を受けたんです。その時の写真が菊野君（菊野勇=現浦幌町収入役）か誰かが撮つた。それがあつた。それを送つてやつて、そして農協の組合長をやつた時の表から撮つたのなどを2~3枚送つてやつただけで。そして作るには作ったけれどどうにも自信がないという訳だ。銅像というのは前にしろ横にしろあらゆる角度から撮つたのがなければで

きないというのだ。それで私に、「来てもらいたい」という訳で行つてきた。私が行つて見たら、大体似ているんだがやはり少し違つたところもあるし、「ここはこうだ。あそこはこうだ」と言つたら見てる前で直すんです。「これでいいんでないか」と言って帰つて来たのですけれどそれができあがつて来ているんです。

山崎 木綿の着物ですか。生涯ずっと。

中川シズ ええ。それを私が19も20才もなつて縫つていたんです。

山崎 紋付きなんていふのは…。

中川シズ ずっと遅くなつてからは着ていた。

山崎 「紋」はもちろんあるんですね。

中川シズ はい。

山崎 どういう紋ですか。

中川シズ げんかたがみ。

山崎 げんかたがみ。はあ、わかりました。

中川政雄 木綿を着たのはちょっとの間ですよ。

山崎 木綿以外といいますと…。

中川政雄 やっぱり絹物。

中川シズ それからよそゆきは羽二重。その代り他人がいい恰好をしたら眼を三角にして「そんなことではやっていけない」って説教です。

山崎 一般農家の？

中川シズ ええ、みな自分がこうした人はね。

山崎 総代人として？

中川シズ はい。もう皆なお爺さんからお金貰つても、自分が自治権あるんですから。何と言つても。

山崎 このあきさんというかたはどんな方ですか

中川政雄 まず、従順な…

中川シズ 無学ではあったけど哀れみ深い人でした。姑さんがきつかったけどちゃんと仕えて。私のお婆ちゃんです。

山崎 ここでですか？ ひいお爺さんになる訳ですね。

中川シズ はい。ここでね。

山崎 いつ内地から来られた訳ですか？ 31年にですか？

中川政雄 31年だね。

山崎 お婆ちゃんだけ？

中川政雄 お婆ちゃんと弟2人に妹。

山崎 中川北松さん、あきさんと、明治30年に北松さんと一緒に来られた方をもう一度言つてい

ただけませんか。熊谷農場に来た時に。

中川政雄 兄弟ですか？

山崎 ええ、北松さんと。

中川政雄 母親。父は亡くなつたから。

山崎 父は向こうで？

中川政雄 ええ、内地で30年に亡くなつたんでしょうね。そうしたら31年ですわ。母とそれに弟の健蔵、それから重兵衛、それから健蔵の下に「おい」という妹がいたのかな。それだけです。

山崎 5人ですね。

中川政雄 ええ。

山崎 そうすると先程シズさんの話でここに来た時には3~4人で來たのですが、その時にそのお母さん、お婆さんですね、その方は熊谷農場に？

中川政雄 そうです。私と一緒にいたんです。ここに來たのは41年か42年です。

山崎 駅通に泊ったお客様の記憶の中で何かこう富山の薬屋とか、そういうような中で特にあのお客様はこんなことがあったとかいうような記憶はありませんか。

中川シズ はい、あります。三井徳穂さんとか、小池次郎とか。ああいう方がここで正大委員つれて参りましたし…。

山崎 三井徳穂？

中川シズ ええ、三井物産会社の社長。

山崎 それから小池次郎？大正ですか？何しに來たんでしょう？

中川シズ 正大委員つれて選挙に。それから木材の人でも覚えた人がやはり帶広にもいますけど。林さんという人もいるし、それからその頃中山さんも木材やってたの。

山崎 木材屋ですか？

中川シズ はあ。

中川政雄 今の中山。それ酒屋のお父さん、お爺さん。

山崎 今、帶広の中山酒屋ですか？

中川政雄 いや、浦幌のです。

中川シズ それはもう大した。飛田さんとか、そういう人も来ましたし、あまり覚えていないですけれど。薬屋さん以外に木材師が一番多くて、それからその中には官庁の人が多くて、村長さんなんか本当に再々來ました。

山崎 この先の、木材屋というのは買ひに…。

中川政雄 いやいや、ここで個人の山買つたり道

有林の払い下げしたりしたりして自分で人夫を入れて切って出して、そういう商売ですね。

中川シズ それから大阪の炭坑が、私でいえば18か19の時、炭坑の技師か、そう人がずいぶん來ました。ここまで來た後はね…。

山崎 道産馬を使って人間を乗せたりした場合に道産馬は背中に乗せるだけでなく何か引つ張りますか？

中川政雄 いや、乗せるだけです。

中川政雄 遅くなつてから馬車や馬橇を使った。

山崎 何か中川駅通のマークありました。別にないですか？馬車になにも書いていない？

中川政雄 ええ。

山崎 馬にも何か焼印も押してないですか？

中川政雄 何も押さないです。

山崎 この（駅通所）裏に50戸ぐらい、その頃なかなか賑やかな部落だったんですけど、その当初、明治、中川政雄さんがこちらに來られた時もうすでに神社ありました？

中川政雄 ありました。

山崎 そうすると留真、その神社の名前は何というのでしょうか。何神社ですか？

中川政雄 「留真神社」です。

山崎 留真神社ですか。これは建立は？

中川シズ 天照大神。

山崎 天照大神。

中川シズ ええ、そう。あの時にお爺さんが灯籠寄附したでしょう。あの灯籠ないだろうか。あれも古いよね。

山崎 それに年号入っていますね。あとで見れば判りますね。

中川政雄 大正だからね。

山崎 そうですか。それではだめですね。

中川シズ ああ、そうか。明治でなきゃだめなんだね。時計は一つこの間あげたんだけど。

中川政雄 時計、柱時計をこの間博物館の方へ届けたんですけどね。1903年の精巧社ですね。

中川シズ 私がここに來た時あった時計。

中川政雄 それがずっとここでかけられて、駅通ができるかけられてからずっと持ち運びして、お婆ちゃんが…。

山崎 1903年というと明治41年頃ですね。

中川シズ この宿屋が、旅館じゃなくて駅通ができた時ちょっとそこに掛けたんです。式台に掛け

たんですから。

山崎 その時持があるんですか？

中川シズ はい。それを私が帯広まで持つて行っていたんですけど。これはなんとかならないかしらと思って…。

中川政雄 そうか。お前が持つて行っていたの。

中川シズ はい。それひとつと、ひとつだね。まず。箸1本貰つていっていい。

山崎 そうしたらその時計は駅通時分の物ですか駅通の時計だったんですね。

中川シズ ええ。まあ、そうして使つていたんでしょうね。

山崎 それをいつ神社に預けたのでしょうか？

中川シズ いえ、神社じゃない。私が持ち歩いていた。

山崎 ああ、あったんですか。

中川シズ はい。

中川政雄 ここから上浦幌へ行つて、上浦幌から本別へ行つて、本別から今度帯広へ行つて現在帯広に居るんです。

中川シズ かなり邪魔臭い物ですわ。

山崎 誰が？

中川政雄 妹（シズ）が。

山崎 今、帯広に居られるんですか。

中川政雄 そこまで持つて行つていたという訳です。

山崎 本別はなんですか。これはどういうのですか？

中川シズ もう言うに言われない。私が体が弱くて皆なもう使い果して、そしてあっちこち。

山崎 本別に住んでいたことがあったんですね。

中川シズ はい、ありました。

山崎 その時計が今役場にあるんですか。博物館に。

中川政雄 今月（12月）にあの、そこへ。

山崎 そうですか。それは貴重ですね。たつひとつですね。

中川シズ 火鉢なんかもあったんだけど、人にあげてしまって。

山崎 火鉢なんかもその鉄の火鉢もあんなものもやつたんですか。なくなる限り腐る物じゃないからね。

中川シズ しかし、いらないと思うものね。それは川畑さんにそのまま置いていっているんだから

だけど川畑さんだってもう居ない人だから判らないね。

山崎 この炉はどこに仕切つてあったんですか？

中川シズ 炉の間の、炉の間でもこの縁側の縁の方に在りました。

山崎 縁側の縁。例えば、ここが今の道路ですねそして8畳・6畠・6畠・6畠・8畠・6畠・10畠と2階。これは2階何畠なんですか？6畠・6畠。随分部屋数多いんじゃないですか。居間はどれになるんですか。母屋といいますか…。

中川政雄 隠の2間です。道路側の方です。

中川シズ 仏間がお爺さんの部屋だったし、それからお婆さんも。皆なそれぞれ使つていたんです

中川政雄 店をやめてからは店の方も。

山崎 これもですか。

中川政雄 それもそうですね。

山崎 そうすると使用人はどこに寝ていました。

中川シズ 使用人というのはね。

山崎 馬追いなんかは？ 馬具はそこの所に堤防の所に小屋建ててありましたね？

中川シズ はい。それから石森さんという人は盲の母親を連れて来て、そのために火が危ないし、その関係上、馬屋に部屋を作つて、そこに寝泊りしていました。

中川政雄 火事起して…。

中川シズ 火事起して馬を焼いてしまってね。

山崎 それが先程の火事？

中川政雄 それは違う。私が未だ今の…。

中川シズ こちらの馬屋焼けた時は、お爺さんが42才の厄年だった。

山崎 石森といいましたか。この方に盲目の母親がいたんですか？

中川政雄 それがちょうど父が内地へ墓を建てに行つた年です。内地の寺へ先祖の墓を。留守だったわけです。

山崎 いつでしょう。これ。

中川シズ お爺さんが42才の厄年だと言つたから…。

中川政雄 あの時、俺まだ学校へ行つていた。

中川シズ まだあの時小さい弟なんかがいたんだものね。

中川政雄 馬小屋の火事は44～5年頃だろうと思うだけれど。

山崎 この駅通はなんでもなかつた？

中川シズ 離れていましたからなんでもなかった
中川政雄 冬だったし、ちょうど雪が屋根にあつたしね。

中川シズ その時奥に寝ていたお婆さんが「何かバシバシいうぞ」と言うので知らせてくれて、外へ出た時にはもうすっかり…。

山崎 そして、その盲の…。

中川シズ お婆さんを負ぶり出したんです。

山崎 助かったの！

中川政雄 いやいや負ぶり出したんじゃないですここで夕飯食って婆連れて来て夕飯食べて長話、あれ酒飲みが2人3人来とったろう。香川の爺さんも秋田の爺さんも。それで、ここで長話した。あの石森というのはあしゃべりで、もうすぐしゃべってしゃべって、もう。そして、「バチバチいうぞ」と家の婆さんに言われて、「行ってみるか」と言って、行ってそこへまわったらもおボーと馬屋燃えていた。

中川シズ お婆さんはあそこにおいていなかったかね。

山崎 「バチバチいうぞ」と言ったお婆さんは？

中川シズ 「中川てり」という人。父親の母ですから、北松の親です。

山崎 火事の時、その盲の方は、その火事の時にはどこに居たですか。

中川政雄 ちょうど夕飯はここに来て食べた。寝泊まりだけむこうに。

山崎 助け出したというのじゃなくて…。

中川政雄 助け出したんではないんです。とにかくその時はもう馬屋は全然もう寄りつけなかったんです。

山崎 気がついた時はもう。

中川政雄 半分位燃えていました。

山崎 馬は？

中川シズ 馬出すことも何もできなかつた。

山崎 何頭いたうちですか。何頭いたうち1頭焼けたんですか？

中川政雄 3頭か4頭いて、種馬が1頭いたんです。その種馬はどうやら馬線を破ったんだね。

山崎 馬をきらしたの。

中川シズ はい。

山崎 種馬が欲しいので、さっきの旅来へですね、ちょいちょい馬を買いに行っているんですよ。だからこの中に出てくるのですね。36、37年の連中と北松さんは、おそらくあちこちで出会っているはずです。

山崎 池田の斎藤徳次郎なんてのいましたよ。高島の方にね。

中川政雄 なにしろ私が32年（明治）生れだから36年か37年ぐらいになるんじゃないかな。

山崎 浦幌に来ているという記事がね、どっかの記事で見たことあるんですね。

中川シズ そうだね。私もおりて学校へ行ったもね。兄さんも行ったでしょう。私も冰屋さんのお婆さんに舟に乗せてもらって学校へ行ったわね。

(次号につづく)

下頃辺式土器とその周辺の諸問題

後 藤 秀 彦

下頃辺式土器は、北海道東北部においてその位置を縄文時代早期の前半に占めている筒形平底を呈した土器である。本型式は1959（昭和34）年8月中旬に東京大学文化人類学教室の泉靖一助教授を主班とする「アイヌ学術調査団」の一一行により発見された。^① 北海道十勝郡浦幌町字吉野1番地所在の「下頃辺遺跡」から発見され、遺跡名をとつて「下頃辺式」との名称を与えられたものである。前述した経緯をもつ本型式が発見・公表以来10

余年を経過した今日、その概念、つまりその内容性といったものを一貫して保持していない、惑いは保持しえなかつたという事実を最近とみに感じ、本論の中でそのことを少しでも具体化できうればと考えまた、先学のご批判とご助言を賜わりたく思いベンをとつた次第である。

この小論を書くにあたり終始ご指導を賜わった札幌啓成高校教諭堀野昭氏並びに帯広柏葉高校教諭石橋次雄氏にお礼申し上げるとともに、常日頃